

[原著論文]

介護福祉士養成教育における「介護観」構築のための  
「終末期介護」教育の実践報告  
—学生の意識調査による検証—

宮下 榮子

キーワード：終末期介護教育，死生観，介護観

A Practical Research on the Terminal-Care Education to Form the View of  
Caring in Preservice Care-Worker Training:  
A Survey on Students' Attitudes

Eiko Miyashita

Abstract

Terminal-care education forms the basis of students' views of caring in preservice training in care work. This study reports on instruction on terminal care for sophomores who major in care work at the department of social welfare in a university. It also examines how the students' attitudes have changed before and after the instruction by analyzing the survey data.

Key Words : terminal-care education, thanatopsis, view of caring

要旨

「終末期介護」教育は介護福祉士養成教育にとって「介護観」構築のための礎になるものである。本研究は、社会福祉学科の介護福祉コース専攻学生の2年生を対象とした「終末期介護」の効果的な授業計画を立案すること、また、その有効性について授業前後の学生の意識変化を調査分析することにより検証したものである。

I はじめに

「社会福祉士及び介護福祉士法」が昭和62年に制定され、介護福祉士という新しい業職が誕生し、介護福祉士

の養成教育が開始された。その後10年を経過して日本は高齢社会となり社会福祉の分野においても社会福祉基礎構造改革と称する大改革が行われ、その対策の要として「介護保険制度」がスタートした。介護保険実施と同時に見直された福祉専門職としての養成制度も、その後10年が経過する中で、より高い専門性と質の向上が要求されることとなり、平成19年「社会福祉及び介護福祉士法施行規則」の一部改正に伴う「社会福祉士及び介護福祉士養成施設等の制度の改正」が施行されることとなった。これによって平成21年度から介護福祉士養成教育課程が再編成されることとなった。厚生労働省は「介護福祉士

---

新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科

[連絡先] 宮下 榮子  
〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地  
TEL・FAX：025-257-4598

養成課程における教育内容の見直しについて」を発表し、「求められる介護福祉士像」として12の項目を挙げた。この項目の内容は大別すると、人間の尊厳と自立、高い倫理性、個性性といった理念や価値観の育成に関する分野とライフステージ全てに対応する生活支援技術の向上の関する2分野に分けられるが、厚生労働省はその「求められる介護福祉士像」の第1番目に「尊厳を支えるケアの実践」を挙げている。従来の介護福祉士養成教育における技術教育に重きを置いた教育に留まることなく、より高い「専門性」と「倫理性」を必要とする「尊厳ある生活を支えるケア」を目標とする教育を求めているのである。

一方、平成20年4月、後期高齢者医療制度が発足した。従来の医療保険制度から切り離した高齢者医療保険制度を独立させると共に、「後期高齢者終末期相談支援料」など、終末期医療に対しても特別な施策をとることになった。また、平成18年4月から、介護報酬・指定基準等が見直され、改正介護保険制度が施行されているが、この改定の一つに「重度化対応加算」がある。この重度化加算の算定要件の中に「看取りに関する要件」が設けられ、要件を満たす場合に介護報酬として、終末期に「看取り加算」が算定されることとなった。このように医療現場においても、介護現場においても「終末期介護」は大きな課題となっている。

「終末期介護」教育は人として生きること、繋がりの中で生きることのあり方を直接問うことのできる教育分野である。「人間の尊厳」という価値観に直接的に働きかけ個々の倫理観の礎を作る支援ができる分野であると考えられる。教育制度・社会保障制度の改革などの情勢変化に呼応し、また人々の「終末期」をしっかりと見据えることのできる「介護観」を持った介護福祉士を養成するためには、「終末期介護」教育を、どのような内容で、どのような方法で学習させるとよいのか。その教育計画の立案を試みた。更なるその授業開始前と終了後に学生の意識を調査分析し、授業計画の効果を検証し、「介護観」にどのように影響するのかを検証したく本研究に取り組んだ。

## II 研究の目的

- (1) 新たな教育課程に相応しい「終末期介護」教育の内容と方法を検討し、教育計画を立案する。
- (2) 立案した教育計画の有効性について検証する。
- (3) 「終末期介護」教育の「介護観」に及ぼす影響について検証する。

## III 研究方法

- (1) 先行研究報告・関係文献・資料の検討。
- (2) 「終末期の介護」授業計画7コマの立案及び授業

実践。

- (3) 授業計画に基づく授業実践 前後のアンケート調査

対象：新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科 介護福祉コースの学生 平成19年度 入学2年生40名

## IV 結果

### 1 「終末期介護」全体授業計画

#### 1) 教育目標

「終末期介護」教育の基礎となる理論と、その上に築かれる介護の分野における専門的課題とを総合して、「終末期介護」全体の教育目標を以下のように設定した。

- ① 「死」を考えることによって、生きることの認識を深め、命の尊厳に畏怖し、他者及び自己の日々の生活を大切にすることができる。
- ② 専門職として客観的に他者の「死」のあり方を考えることができる。
- ③ 「死」への生物学的過程を理解することができる。
- ④ 倫理的に「死」を考えることができる。
- ⑤ 「死」を社会的背景、または社会関係、人と人とのつながりの中で捉えることができる。
- ⑥ 「終末期」への介護に敬意と誠意をもって臨むことができ、本人及び家族への悲嘆に対応する支援ができる。
- ⑦ 「終末期介護」におけるチームワークの方法と介護福祉士の役割が理解できる。

#### 2) 授業項目

- ① 「死」の意義について—「生命と死」「生と生活」「役割と関係性」「生活の中での死」死ぬことは生きることの延長線上にある。生活とは生きるための行為の全てを意味する。生活は関係性の中で営まれる。(使用教材 No.1~4)
- ② 「死」と社会—「死に場所」「死に方・死因」「死の統計」など、死の現状を理解する。孤独死・介護心中・虐待死などの現状と課題。これらの検討から、福祉の視点で「死」を捉え、介護福祉士としての社会的役割を認識する。(使用教材 No.7~10)
- ③ 「死」と社会保障—憲法で保障される「基本的人権」「文化的生活」と「死」、「社会保障制度」と「死」などについて認識を深める。(使用教材 同上)
- ④ 福祉施設における「死」の看取り—施設における「看取りの現状とチームケア」「介護保険制度との関連」を中心に「看取り」を理解する。(使用教材 No.12)
- ⑤ 地域・在宅における「死」—地域・在宅における看取りの現状と課題を知る。
- ⑥ 「死」の医学的倫理—自殺補助・臓器移植・安楽死・

尊厳死・リビングウィルについて、現状と問題点について認識を深める。「人権としての自己決定」「自殺補助は殺人か自殺か」を考える。(使用教材 No.5)

- ⑦ 「死」の病態変化・観察と対応—臨死期の医学的变化。臨終期の病態の観察本人・家族への対応の方法を理解する。
- ⑧ 緩和ケアと悲嘆のケア—専門機関であるホスピス・ビハラー、およびホスピスケアの現状と役割を知る。本人・家族への悲嘆ケア(グリーフケア)の方法を理解する。
- ⑨ 死後の対応—死後の処置・家族へのアフターケアのあり方を知る。(使用教材11, 12)

3) 教材の選出

アルフォンス・デーケン、押谷由夫、得丸定子等は「死」の教育などの価値観や理念に関する教育では、特にその教材の選出が重要であることを指摘している。そこで今回の授業計画では視聴覚教材を多く選出し、以下のような教材を用いることとした。

- 教材No.1 絵本、レオ・バスカーリア作、『葉っぱのフレディー—いのちの旅—』
- 教材No.2 V・E・フランク『夜と霧』(1995)の巻末写真
- 教材No.3 V・E・フランク『どんな時にも人生にイエスと言う』
- 教材No.4 VTR NHK スペシャル『映像の世紀 第二次世界大戦 世界は地獄を見た』2003
- 教材No.5 VTR NHK ETV特集『自分らしく死にたい“安楽死”オレゴン』2000
- 教材No.6 紙芝居 森鷗外『高瀬舟』筆者編集 絵田中千尋(社会福祉学科3年)

教材No.7 VTR NHK ETV特集『東京山谷のホスピス 最後を生きる—孤独な高齢者が迎える安らかな死—』2008

教材No.8 VTR NHK『福祉ネットワーク 老老介護の死角「なぜ救えなかった介護保険」』2006

教材No.9 VTR NHKクローズアップ現代『防げなかった悲劇—相次ぐ介護心中・殺人事件』2008

教材No.10 VTR NHK クローズアップ現代『進まぬ在宅医療の緩和ケア』2007

教材No.11 VTR NHK 福祉ネットワーク『最後は我が家で—在宅ホスピス医—』2008

教材No.12 VTR NHK にっぽんの現場『“最後”までの日々—高齢者の小さな願いをかなえる特養ホーム— けま喜楽えん』2006

2 授業開始前と終了後の意識の変化

1) 調査項目の選定

調査項目を決定するにあたり、大阪大学大学院人間科学研究科・人間科学部人間行動学講座 平井啓等の考案による、臨老式「死生観尺度」の一部を活用した。

今回の調査では学生の「死生観」のみではなく、「死生観」が「介護観」に繋がるものであること「死生観」が「介護観」に繋がるものであることから臨老式「死生観尺度」を全項目使用するのではなく、各因子の項目の中から、「死生観」がよりの確に把握されると思われる一項目を抜粋して使用することとした。Q1~Q4

他の調査項目については、授業目標に沿った授業のテーマごとの学習目標をより端的に表現できる質問項目とし、全部で12項目の質問内容とした。

表1 各質問項目回答の授業前後の得点の変化

項目	授業前 (n=38)		授業後 (n=37)		Z
	平均	(SD)	平均	(SD)	
Q1. 死に逝く人に死後の世界はある	4.63	(1.8)	4.43	(1.5)	-0.727
Q2. 死は恐ろしいのであまり考えないようにしている	3.66	(1.7)	3.89	(1.6)	-0.491
Q3. 人の生死は目に見えない力(運命・宿命など)によって決められている	4.16	(1.7)	3.92	(1.6)	-0.597
Q4. 私は人生にはっきりとした使命と目的を持っている	3.05	(1.5)	3.35	(1.4)	-1.159
Q5. 死にも社会性がある	3.59	(1.3)	4.76	(1.1)	-3.741 **
Q6. 人によって生き方があるように、死に方がある	5.47	(1.4)	6.16	(1.1)	-2.371 *
Q7. 死ぬ時も生まれる時も同じように誰かの支援が必要である	4.92	(1.6)	5.78	(1.0)	-2.228 *
Q8. 孤独死は、一人暮らしの高齢者の問題である	4.00	(2.0)	3.43	(1.8)	-1.211
Q9. 介護者として、死に逝く人の前で悲しみを表現するのは良くない	3.21	(1.0)	3.03	(1.1)	-0.678
Q10. 「死」の自己決定は自殺を意味するものである	2.84	(1.3)	3.30	(1.4)	-1.311
Q11. 本人が表明した「尊厳死宣言」・「臓器移植」登録は最後まで尊重されるべきである	5.97	(1.1)	6.05	(1.1)	-0.326
Q12. 家族の悲しみのケアは本人の死亡後に行うものである	3.03	(1.8)	2.78	(1.5)	-0.412

\*p<0.05 \*\*p<0.01

2) アンケートの結果

(1) 授業開始前と授業終了後の有意差検定

データ分析はSPSS13.0にて死生観尺度と他の項目間でMann-Whitneyのu検定を実施し関連性を検討した。分析結果(表1)。

明らかに有意差を示した項目は、(\*\*p<0.01) Q5「死にも社会性がある」。有意差傾向を示した項目は、(\*p<0.05) Q6「人によって生き方があるように、死に方がある」、Q7「死ぬ時も生まれる時と同じように誰かの支援が必要である」の項目であった。

これらの項目に関しては、特に具体的な視聴覚教材を駆使して授業を展開した項目である。

(2) 横棒グラフからの分析

授業前後における学生の意識の変化を横棒グラフによって視覚的に分析した。

① 「死生観」の変化

「死生観」尺度による4項目については、質問項目1から4は、臨老式「死生観尺度」から抜粋した項目である。この4項目を合わせて検討する。質問項目の1「死に逝く人に死後の世界がある」については“有る”と明確に答えた者が10.3ポイント減り“無い”と明確に答えた者が5.4ポイント増えた(図1)。

質問項目2「死は恐ろしいので考えないようにしている」については、“考えないようにしている”は授業前と比較すると13.2%から5.4%と半減している。質問項目3「人の生死は目に見えない力(運命・宿命など)によっ

て決められている」については、「運命・宿命」を肯定する者と否定する者では肯定する者が授業前には7.9ポイント多かったが、授業後は肯定・否定者が同数の37.8%となった(図2)。

② 「死」の持つ社会性に対する意識の変化

有意差が検証された質問5・6・7について横棒グラフ図3・4・5に示す。

V 考察

授業開講前に学生が持っていた「死生観」は授業終了後には確かに変化していた。死の持つ倫理哲学的側面・社会的側面・生物学的側面・介護技術的側面といくつかの側面からの授業を試み重ねることによって新たな「死生観」が構築された。まず「死」を考えることは嫌なことだとする意見が減り、「死」に対する拒否感が薄れ、直視すべき課題として認識される傾向が示された。

「死」の持つ社会性については有意差として検証されたように、学生の意識は明らかに変化を示した。「終末期介護」教育の基本目標として「死」を生活のなかで、社会生活の中で捉える視点、生きる「権利」と同じように「死」を権利としてとらえる視点に重きをおく授業計画は明らかに教育効果を示したと考えられる。さらに介護福祉士として「死」への援助についての役割をおぼろげながらも自覚するに至ったのではないかと考えられる。

授業ごとに視聴覚教材を駆使したが、学生の感想は使

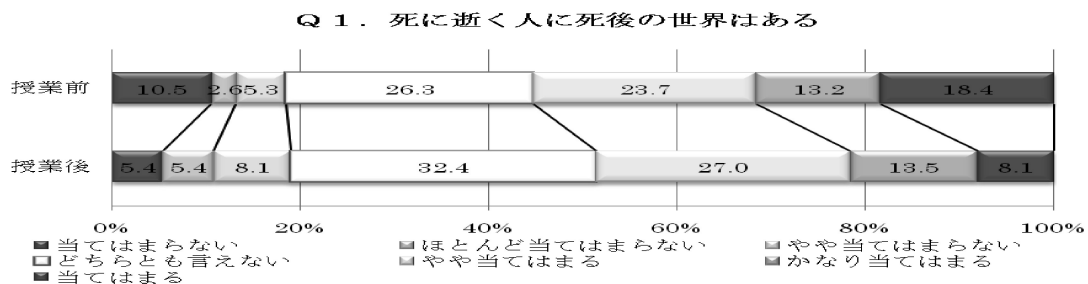


図1

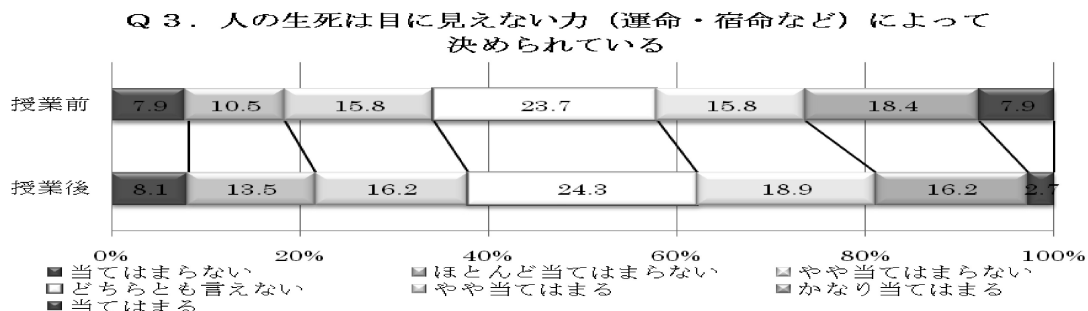


図2

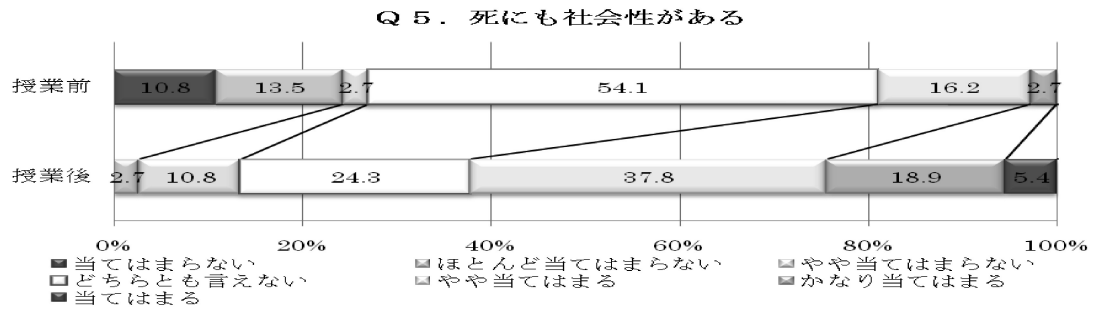


図 3

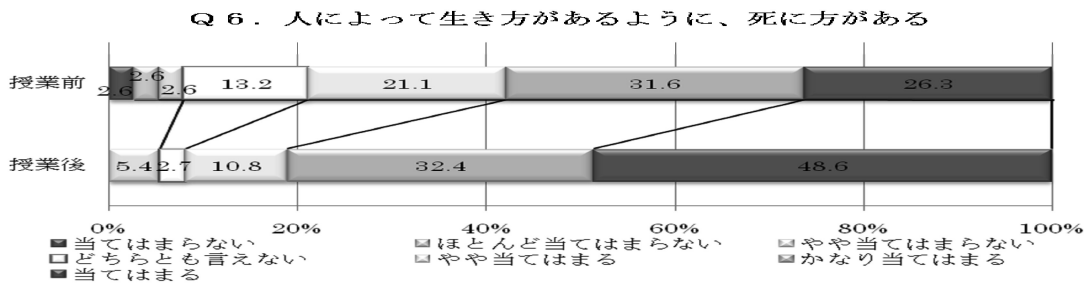


図 4

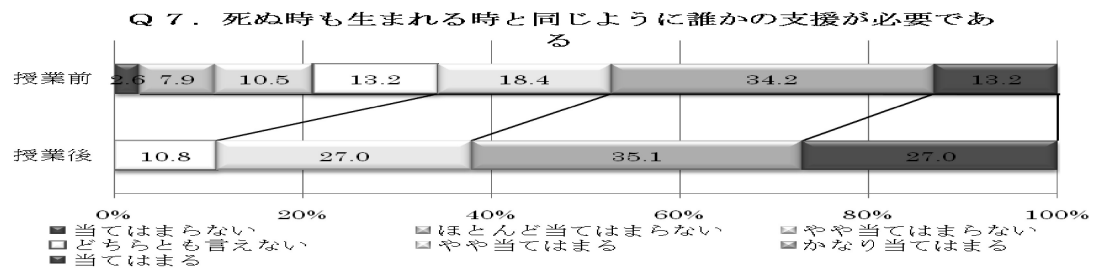


図 5

用した視聴覚教材の一場面から受けた衝撃などを具体的に記載したものが多く見受けられ、感性からの刺激が理性に多いに影響を及ぼしたものと考えられた。理念や価値に関わる授業の教材は視聴覚に訴えるものが効果的であることを確認できた。

今回の「終末期介護」教育の授業計画及び実践は、学生の意識変化の調査分析結果から、その教育目標、授業項目、使用教材において有効なものであると検証された。

介護福祉士養成教育にとって「終末期介護」教育は「介護観」の礎となりその後の成長に大きく影響してい

くものと考えられる。

## Ⅵ 今後の課題

今回、立案し実践した「終末期介護」教育計画では、授業目標、授業項目それぞれに対して学生がディスカッションをする時間的余裕が無く、今後は時間の確保が必要とされる。

また、今回の授業計画が「死生観」「介護観」の礎として有効であると検証されたが、実際に介護現場で出会う「看取り」の場面で適応できる実践力をつけるための授業研究も課題として残されている。